## 4.5 文章を読みやすくする

それぞれのパラグラフが書けたら，まず誤字･脱字や漢字変換のミスがないかをチェックする。また加筆修正を繰り返した文章は，主語(主部)と述語(述部)が捻(ねじ)れたりどちらかが消えてしまったりしていることも多い。よく読み直して，わかりにくい箇所やふた通りの意味にとれる箇所がないか確かめる。そして以下のような点に気をつけて文章をさらに読みやすく推敲しよう。

### 4.5.1 文の長さ

接続詞などを使って一文が長くなると，理解しづらく意味が曖昧になる傾向があるので，文を短く切り簡潔になるよう心がけるのがよい。しかしながら，述べたい意味内容が複雑な場合に短く切りすぎると，逆にうまく伝わらない場合もある。もし長い文にならざるを得ない場合は，文中の節や句の関係を明瞭にして内容が誤解されないように工夫する必要がある。

### 4.5.2 語句と表記の統一

ある語句の意味･範囲を意識して使うと読者に情報が正確に伝わる。特に専門用語は本文中あるいは脚注などに定義して使うのがよい。よく似た語句を複数使う場合は，意味を区別して用いているのか，単に繰り返しを避けるために用語を変えているのか注意深く吟味する必要がある。文章の途中から別の語句を同じ意味に使ったり，逆に同じ語句を別の意味に用いてしまっていたりすることもあるので，長い文章の場合には特に注意すべきである。またひとつの文章の中で，ある語句の表記が複数混在している(「表記の揺れ･揺らぎ」とよばれる)場合もある。気になる語句がでてきた場合は，文章内にあるその語句を全て検索して，各々が使われている意味を確かめたり，表記を統一したりすべきである。

使う語句を迷ったときには辞書(電子辞書やネット辞書も含む)で調べることになる。例文付きの類語辞典などが役に立つ。類語辞典が手元にない場合は，和英辞書と英和辞書を順に(和→英：英→和)使うと多くの類義語や関連語を導くこともできる。複数の辞書を同時検索できるインターネット上のサイトもある。これらをいつも活用して語句の意味を正確に知り，類義語との差異を把握して語句を選ぶ。この習慣があなたの文章力を高めることにつながる。

### 4.5.3 句読点

日本語に句点「。」と読点「，」が使われ出したのは明治以降で，意外に思う人も多いだろうが，それまでの日本語に句読点はない。話し言葉にはもちろん「，。」はないので，メールの文章などでは「，。」なしで書く機会が増えている(字数制限がある場合には改行のほうが文字数を減らせるからか)。しかしながら，アカデミック･ライティングでは句読点を適切に用いるべきであることはいうまでもない。

◎句読点の組み合わせ

縦書き日本語では「、。」しか使わないが，横書きでは「、。」「，。」「，．」の3つの組み合わせ何れも使われているのが現状である。混在させなければどの組み合わせでもよいとされているが，特にアルファベットや数字が頻繁に現れる理系の横書きの文章では「，。」をお薦めする。「、」はアルファベットとそぐわないし，「．」と「，」は視覚的に区別しにくく，小数点付きの数値が出てくると紛らわしい。

> 国語審議会が昭和 26 年に定めて以来，横書きでは「，。」を使うのが正式とされていて，現在日本で使われている横書きの小中高の教科書のほとんどは「，。」である(センター試験の問題文でも)。にもかかわらず，官報などがそれに従っていないのが実情である。実情やその歴史については<http://www.remus.dti.ne.jp/~ddt-miz/think/comma.html>に詳しい。(参照 2020-01-10)

◎読点がなくても誤解されない文が優れている

読点「，」の必要性を示すためにこんな例がよく挙げられる。

①警官が自転車に乗って逃げる泥棒を追いかける。

②警官が，自転車に乗って逃げる泥棒を追いかける。

③警官が自転車に乗って，逃げる泥棒を追いかける。

意味がふた通りにとれる①が良くないのはもちろんで，②と③のどちらかが良い。だがアカデミック・ライティングでは「，」を含む②と③もあまり好ましくなく，次の④と⑤のどちらかが良い文といえる。

④自転車に乗って逃げる泥棒を警官が追いかける。

⑤自転車に乗った警官が逃げる泥棒を追いかける。

修飾関係が不明確になってしまうのを避けるためには，修飾距離が短くなるように語順を変えたり動詞を連用形や連体形に変えたりして工夫すべきだ。「，」は修飾関係を明らかにするが不安定にもしてしまう。もっと長い文である場合や前後にさらなる修飾関係がある場合も多いアカデミック・ライティングでは，④や⑤のように「，」を使わなくても誤解されない文に変えて，どうしても必要な場合に「，」を使うのがよい。

> 句読点などの詳しい文章作法については，本多勝一著『日本語の作文技術』などを参照のこと。